

一年の終り、十二月三十一日の夜には「時」のおばあさんが来るというはなしを小さいときからきいたような記憶がある。「時」のおばあさんは、柱時計の下で、編物をしながら、子どもたちにおはなしをしてくれる。そのおばあさんは、めがねをかけているものと私は信じこんできた。めがねは、十二か月の時を刻んで、経験と知恵をつんできたことの象徴のような気がする。めがねを通して見るおばあさんの目は、優しい中にも威厳があり、若い時の生命の力だけでなく、苦労に刻まれた人間の精神の力を思わせる。子どもはめがねが好きである。小さい子が、めがねをかけた人の顔をじっとみつめていることもあるし、そのめがねをとうろうとして手を伸ばすこともある。家庭でも幼稚園でも、紙を切つてめがねを作ると、きつと子どもたちは興味をもつ。めがねには、子どもの関心を魅く何ものかがあるらしい。素顔のままの目で

はなくて、何か人工の力を加えた目。拡大鏡や、顕微鏡、望遠鏡も、子どもが目輝やかせて興味をもつ道具のひとつである。これも、素顔の目では見ることのできないものを、人工の力を加えることによって見させるものである。「時」のおばあさんの目は、めがねをかけているのがふさわしいようである。それは子どもたちがまた持つていない、文化と知恵の集積の象徴でもある。めがねには、子どもを魅きつける力と、遠ざける力があるようで、いろいろ考えると、面白いことがたくさんあるだろう。

日本の幼稚園も百一年目を過ぎたが、幼稚園の歴史の中で積み重ねられてきた先人の努力と知恵は、果して生かされているだろうか。幼稚園は子どものものとして育っているだろうか。幼稚園を幼児のものとしようと苦闘してきた歴史の上になさやかな努力を重ねてゆくことを、幼稚園第二世紀の課題としたい。(津守)

幼児の教育 第七十六卷第十二号

十二月号 © 定価二〇〇円

昭和五十二年十一月二十五日 印刷
昭和五十二年十二月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。